

# 浅見和彦・伊東玉美責任編集

## 「新注古事談」

佐藤 信 一

遂に出た。待ちに待った「古事談」の全注釈である。伊東氏は先に「古事談抄全釈」を刊行された。それに続く快挙といつてよからう。そもそも「古事談」は、もつと読まれて然るべき作品なのに、読みやすい注釈に恵まれなかった。自分は古典文庫（現代思潮社刊）の世代だが、つい最近まで「古事談」所収の説話を確認したいという学生に古典文庫の「古事談」を貸したものだ。新大系が刊行されているのにもかかわらず、である。

本文は慶応義塾大学図書館蔵本の「古事談」（開架番号一〇X一三六一一六。全六冊）を底本としている。これを平仮名交じりに書き下している。

各話毎の冒頭に新しく表題をつけて新日本古典文学大系本の各巻毎の説話番号を付し、行末に古典文庫本の通し番号を付記する。これによって我々は三つの注釈書を自由自在に往還できるのだ。

また、底本の訓みが尊重されていることも重要であろう。校注者の判断で読み方を注記した場合には（ ）で明示しているという。また、底本の返り点も重んじているとのことである。伊東氏の担当は、全体の調整と巻一「王道后宮」すべて、巻三「僧行」の六二〜八九話である。全体の調整には浅見和彦氏と

伊東氏があたり、他に蔦尾和宏氏、土屋有里子氏、木下資一氏、浅見和彦氏、高津希和子氏、内田澁子氏、山部和喜氏、松本麻子氏、高津希和子氏が、担当されている。また、「類話一覽」を柳川響氏、「人名索引」を野本東生氏が受け持っておられる。

全体の総説とも言える「古事談」については、これからの「古事談」研究の指針となるであろう。「はじめに」は、「古事談」に「歴史の秘話や意外なこぼれ話が数多く収められている」と指摘する。余り読まれなくなったのは「文体が漢文訓読調であるため」か、それにしても「便利な教科書ないしは副読本」として読まれてきたことを指摘する。

「古事談」の成立と作者」では、作者を源頭兼に比定し、彼の人生を辿る。

「構成と内容」は、「古事談」の大枠が「テーマ毎の類聚形式をとっている」ことを指摘し、「全巻の構成や配列」から頭兼の構想・表現しなかったものが「明らか」になるといふ。時代の「基準作」として「古事談」はとらえられるべきであるとする。

「諸本」では、「読み仮名」の付された慶応義塾大学図書館蔵本（底本）によって、江戸期の読者が漢文体を基調とする鎌倉時代の「古事談」をいかにして読み解いたかが知られるとする。機会があったら、この本と、今までの注釈書とを並べて比較してみるとよい。いかに簡潔で的確な注が施されているか、目の当たりにするだろう。

(二〇一〇年一〇月三〇日刊 A5判 三五二頁 笠間書院)